

## 「久しぶり。」

第 13 期 OB 長妻 泰成

「久しぶり。」この言葉は、年が明け、地元や高校時代の友人たちと会うと必ず出る言葉である。その言葉を発することによって、自分の中で懐かしい時代に戻った気分になり、昔話をしながら友人との会話を楽しむ。そんな 2019 年初めを過ごしていたのだが、ついこの前、小野ゼミ 13 期日本語論文チームのメンバー達と一泊二日の旅行に行った。

非常に楽しい旅行だったのだが、思い返すと誰一人「久しぶり。」のお決まりの会話がなかったのである。

朝 9 時半、東京駅南口に集合。約 2 年ぶりに会うメンバーが多かったが、論文執筆にグル学に集まった時の感覚。

早朝 4 時半までみんなで起きていたのだが、「久しぶりトーク」もなく楽しく過ごした。

みんなで笑う話題は結局、論文活動中の苦しかったこと、喧嘩して雰囲気が悪くなったこと、矢野がストレスで髪が薄くなったこと、など論文活



宿泊したグランピングにて（著者は左端）

動中の思い出ばかりであった。

旅行が終わり楽しかったなあと余韻に浸りながら、ふと、なぜ「久しぶり。」の言葉を誰一人発しなかったか考えた。やはり、小野ゼミの活動が濃すぎたおかげで久しぶり感がなかったこと、そして小野ゼミでの辛く、楽しかった思い出を共有していることが影響しているのかなあと。それくらい深い関係だからこそ、「久しぶり。」の会話がなかったことに気づいて、少しうれしい気分になり、小野ゼミに入ってよかったなあと改めて思った。

何を伝えたいのか纏まりのない文章になってしまったが、小野ゼミのメンバーとはこれからも旅行をしたい、とそう心から思った旅行だった。



富士山の前にて（著者は右から3番目）



春学期納会に参加した著者（左から2番目）